

被災と復興

4月14日、16日にわたって発生した平成28年熊本地震におきまして、まずは心よりお見舞いを申し上げます。死者は関連死も含め100名以上にのぼり、避難者は最大で18万人を数える大災害でした。雇用や農林業、観光はもちろん経済を含んだ、全ての生活に甚大な被害を及ぼした天災。物資の受け渡しや新しい生活基盤の移行で混乱していた最中に、多くの避難所では大人の踏ん張りと共に、子供たちが率先して、協力し合い、情報を持ち合い正常化の手伝いをしていました。本来であれば、我々大人こそが、気遣いや心配りを「つながりによる協力」という形で見せたかったのですが、この未曾有の災害はそれを許してくれませんでした。ある意味、我々大人へ日常を考え直す警告だったのかもしれません。そう考えると、復興に欠かせないのは防災教育と共に、根源となる家庭教育や日ごろからのつながりや共有への意識付けや学び直しという備えなのかもしれません。つまり、日常における親子の会話と、親同士の横の関係構築です。繋がりは情報収集の基本ですし、防災や災害発生時の行動決断にも大きな要因になります。子供や家族、自分自身の安全確保にも欠かせません。子供たちはスマートフォンやインターネットを活用し、相互の安全確認を行い、物資の有無を知り、人手のない所に応援に行きました。今回の地震で「子供が大きく成長した!」という事をよく聞きます。では、我々大人は?保護者は?もちろん、必死で家族を守ったと思いますし、様々な状況があったことだと思いますが、今一度子供の姿を参考に教育という観点からもう少しできることはないか?考えて良いのかもしれません。

PTA活動について

PTAとは?と議論が飛び交う昨今、その存在意義や役割を改めて検証し、認知し、共有する時期が来たのかもしれません。また、今年度の熊本県公立高等学校PTA連合会調査広報員会では生徒の頑張りはPTAとして当然にバックアップ、クローズアップしていくものの、その本来の姿である子供たちを支える保護者にスポットを当てて、その取り組みや関わりをお伝えしていきたいと思います。

PTAとは、アメリカでは1897年、日本では1946年に誕生した子どもの全人格を健全に育成する独立した協議団体です。日本では戦後直後から現在の文科省が組織化や活動を推奨しており、親と教師で構成され平等な立場で教育について学び、キャリア伝導の為に自己を高める団体ともいえます。

PTAの主な活動は…(ベネッセHPより引用)

- ① 保護者と教師の平等な協力体制を作る。
- ② 自分の子供が通う学校の、又は学校教育そのものの理解による共育を目指す。
- ③ 家庭教育の危機を救うための情報交換や情報提供の場になる。
- ④ 校外の生活指導と教育環境の改善を目指す。
- ⑤ 会員相互の学習機会を作る。



という5本柱の基に様々な活動がなされていますが、その必要性について以前と比べると存在感が希薄になっているのが現状です。学校教育の金銭的補助や保険の完備、イベントでの協働を学校と共に取り組んでいるのですが、その実態を広め切れていないかもしれません。社会変化の激しい不透明な社会の中で、学校、教職員、保護者の三位が一体にならなければ、子供たちの真の未来を作ること、また子供たちが自分たちで築いていく未来を選択させることがより困難になってしまいます。私たちPTAはそれらを念頭に学校に自ら歩み寄り、真剣に楽しみながら活動をする姿を広める使命があるのかもしれませんね。

時同啄喙

この書は、27年度県連副会長の徳村剛さんから寄贈されたものです。「啄喙同時」は仏教の言葉で、鳥のひなが卵から生まれ出ようと殻を内側からつつくことを「啄」といいます。その時、すかさず親鳥が外から殻をついばんで破る、これを「啄」といいます。両者のタイミングが一致して(同時)はじめて殻が破れて雛が生まれることができるという意味です。親子関係にもPTA活動にも学ぶべき大切な言葉だと思います。

福島県連からエール “がんばっぺ熊本!!”

